市立図書館・郷土作家コーナー

佐世保市立図書館の中2階には、郷土作家コーナーがあり、井上光晴、白石一郎、村上龍、佐藤正午の写真やプロフィルのパネルのほか、生原稿、執筆にまつわる品々が展示されています。これらの郷土を代表する4人の作家の作品をご紹介します。

白石一郎　井上光晴　佐藤正午　村上　龍

井上光晴

昭和元年生まれ。崎戸炭鉱で働いた後、佐世保で敗戦を迎えました。

代表作「虚構のクレーン」を発刊したのは、昭和35年のことです。主人公が、空襲で焼け出された東京を去り、ふるさと佐世保へ向かう夜行列車の中で物語は始まります。原爆、炭鉱の労務者、天皇制など小説にはなりにくい政治的な課題が、庶民の生活や心を通して、生き生きと描かれています。昭和38年に発刊された「地の群れ」で作家としての確固たる地位を築きました。

井上光晴にとって佐世保は、日本の思想的な課題が詰まった所で、東京からふるさとを客観的に見ながら作品を書いたようです。

昭和52年には、佐世保市で文学伝習所を開設し、全国に広がりました。平成4年に66歳で亡くなりました。

白石一郎

昭和6年生まれ。第2回佐世保北高等学校卒業。一貫して時代・歴史小説を書いています。昭和62年に直木賞を受賞した「海狼伝」とその続編「海王伝」で、新しい本格的歴史海洋小説の分野を開拓しました。

白石文学の舞台は、長崎、博多など九州を中心として、広くアジア大陸まで広がっています。

村上　龍

昭和27年佐世保生まれ。昭和51年、24歳のときの第1作「限りなく透明に近いブルー」が、群像新人賞、芥川賞と立て続けに受賞し、話題となりました。

村上春樹と共に、「両村上」と呼ばれ、現代日本文学をリードする作家です。「五分後の世界」「ヒュウガ・ウイルス」「希望の国のエクソダス」など、SFタッチの文明批判的作品で新しい作風を作り出しました。このように、次々に実験的な作品を発表するとともに、スポーツ、映画、テレビなど幅広い分野で活躍しています。

佐藤正午

昭和30年佐世保生まれ。昭和58年に第1作「永遠の½」で、第7回すばる文学を受賞し、この作品は佐世保を舞台に映画化されました。

また、高校時代の体験を基にし、70年代の佐世保の自然が瑞々しいタッチで描かれた「童貞物語」は、日本版「アメリカングラフィティ」といったほのぼのとした作品です。

本格的な長編小説「彼女について知ることのすべて」を書いた後、作風も成熟の境地を見せ、「取り扱い注意」「Y」「ジャンプ」など数々の大人の恋愛小説を発表しました。

佐世保に在住し、日々の出来事と人間的な優しさを大事にする作風は多くの人々に愛されています。

△佐世保北高校の桌の庭（佐藤正午と村上龍の作品に登場）

市立図書館

ふるさとで書く二人

詩は人生のあかし

松本知沙さん

昭和3年佐世保市生まれ。須佐町在住。昭和44年に小説「原爆の顔」を出版。昭和58年には第1詩集「音高く流れぬ」を出しました。平成11年には、第2詩集「八重桜」で、第9回伊東静雄賞を受賞。松本さんの作品には、大きく分けて、戦争、恋愛、家族の3つのテーマが流れています。

「熟い瓦礫に埋もれた道を　私は玄関の方へ歩いて行った　そして私の好きな八重桜の木が　あとかたもなく燃えてしまったのを見た」（八重桜より）

敗戦ですべての価値が崩壊し、新しい生き方を求めて心はさまよったということです。

しかし、若いころの実らなかった恋愛体験と、その後のご主人への変わらぬ愛が、松本さんの心の中にいつも流れていて、戦後の人生を潤いのあるものにしてきたようです。

「金粉の舞っているような朝の光の中で　燃え立つ真紅の夕映えの中で　白い花を空高くかかげて　あなたの愛が　純白の炎となって燃える　私は魂を奪われて　花を見る」（白木蓮より）

詩は、例えばナイアガラの滝を見て、とても言葉では表せないほど感動したあと、2、3カ月してから音楽などを聞いているときなどに突然出てくるそうです。

20歳のときも、現在も気持ちは少しも変わらないそうですが、若いときよりも日常生活の小さなことや自然の移ろいに感動するということです。

ありのままの心で

中本昭夫さん

昭和3年朝鮮平安道新義州府生まれ。田原町在住。中本さんは、港湾経済学者、小説家、随筆家の3つの顔を持っています。小説は20編ほど書いたそうですが、代表作は「白い風と赤い風」と「大河のごとく」です。

「白い風と赤い風」の舞台は、中国との国境の町、北朝鮮新義州。日露戦争時代、朝鮮人白になりすました脱走兵西岡の目を通して、当時の朝鮮とその中の日本人社会の様子が描かれています。特に国境を流れる鴨緑江の自然描写が印象的です。

「鴨緑江の氷は固く、鏡のような平面を所々せり上げてライトブルーに輝き、太陽の光に反射して美しい。そして氷を真上から見ると、深い底知れぬ暗緑色である」

わかりやすい文体で、全編を通じて、国境や民族を越えた人間と人間の本当の付き合いは何かというテーマが貫かれています。国内でも高い評価を得るとともに、日韓新時代を迎えた韓国でも、多くの人たちに読まれています。

「大河のごとく」は、実業家・藤井友市の伝記小説です。明治・大正・昭和の佐世保の歩みが、一人の佐世保を代表する人物のドラマを通して生き生きと描かれています。

中本さんに小説について尋ねると、「目線を下げて書くことが大事。見てもらいたいという虚飾を捨てて書いているので、心が晴れる」と語りました。

佐世保文学年表

佐世保からもたくさんの作家が出ているんだね。

自由な雰囲気や豊かな自然、中央からの影響を直接受けることなどが、その原因かな。

明治40年	北原白秋が、与謝野寛（鉄幹）など4人の詩人を伴い佐世保を訪れる。その後、紀行文「五足の靴」を連載
昭和2年	野口雨情が大野小学校で講演し、即興で「弓張岳」の詩を作る
昭和6年	野口雨情がレコード歌謡「佐世保小唄」を作るために、2度目の来佐
昭和7年	種田山頭火が佐世保を訪れ、俳句を数句詠む
昭和16年	秋永芳郎が、「翼の人々」で航空文学賞を受賞
昭和32年	穂積驚が「勝烏」で直木賞受賞
昭和48年	野呂邦暢が、陸上自衛隊相浦教育隊の体験を基に描いた「草のつるぎ」で芥川賞受賞
昭和51年	村上龍が「限りなく透明に近いブルー」で、第19回群像新人賞と第75回芥川賞を受賞
昭和52年	井上光晴が佐世保文学伝習所を創設
昭和54年	峰隆一郎が第5回問題小説新人賞を受賞
昭和58年	佐藤正午が「永遠の½」で第7回すばる文学賞受賞
昭和62年	白石一郎が「海狼伝」で第97回直木賞受賞